

モーツァルトと石川啄木

—— あらえびす『バッハからシューベルト』をめぐる ——

箱石 匡行*

(2003年3月10日受理)

Masayuki HAKOISHI

Mozart and Takuboku ISHIKAWA

: the description in the *From Bach to Schubert* of Araebisu

はじめに

岩手大学公開講座「石川啄木」は平成5年(1993年)に開設され、それ以降、毎年、継続して行われている。この講座は岩手大学とくに教育学部の生涯学習サービスのひとつであって、この分野における本学部の教育実践としても意義あるものといつてよいであろう。この講座は、平成8年(1996年)には、講義内容に宮澤賢治を加えることとなった。この年は、石川啄木生誕110年、そして宮澤賢治生誕100年に当る。この年から、この講座は、名称は「石川啄木」であるが、内容は〈石川啄木と宮澤賢治〉となったのである。さらに、その翌年、平成9年(1997年)から、〈野村胡堂・あらえびす〉も、取り上げられるようになった。野村胡堂・あらえびすは、いうまでもなく、岩手県紫波郡紫波町出身の小説家であり、レコード音楽の評論家でもある。そして彼は盛岡中学時代から啄木と交友関係をもっていたのである。野村胡堂・あらえびすと石川啄木、宮澤賢治というテーマについては、私がこれを担当してきた。

この講義のなかで野村胡堂・あらえびすについて話すにあたって、私は、講座の名称が「石川啄木」であるので、石川啄木との関係を中心にし、さらに宮澤賢治にも関連させつつ、野村胡堂の生涯とその業績を紹介するよう努めてきた。また、石川啄木と宮澤賢治と野村胡堂の三人はいずれも岩手県出身であることから、その資質の違いはあっても、この三人に共通する〈文化の風土性〉といったものを明らかにすることにも意をもちいてきたつもりである(もっとも、それがどの程度、成功したかは、受講者諸氏の評価に委ねたいと思う)。

以下の文章は、平成14年5月25日(土)に、私がこの講座において「野村胡堂・あらえびすの啄木評 —— 音楽評論『バッハからシューベルト』を中心に ——」という題で話した内容を、当日配布した資料をもとにして、まとめたものである。

*岩手大学教育学部

I 野村胡堂・あらえびすと石川啄木

野村胡堂・あらえびすが石川啄木と出会ったのは、野村胡堂の回想によれば、盛岡中学時代に及川古志郎に紹介されてのことであった。以来、二人の交友関係が始まるのである¹⁾。

野村胡堂・あらえびすが、そのエッセイのなかで石川啄木の人柄について、また二人の交友関係について語っていることは広く知られている。そうした記述は、たとえば、『胡堂百話』や『随筆銭形平次』に、また『面会謝絶』や『コーヒーの味』に見出される。これらの作品は、いってみればエッセイや評論を集めたものといえるであろう²⁾。

ところで、平成14年4月28日(日)の午後に、私は野村胡堂・あらえびす記念館を訪れ、図書閲覧室で、〈あらえびす〉の著書『バッハからシューベルト』を読んでいた。そしてこの作品のなかに石川啄木について言及している個所があることを私は「発見した」。

たしかに、「発見した」というのは、大げさな表現かもしれない。それというのも、野村胡堂・あらえびすが石川啄木について行った批評とか記述といったものがあることは確かなことであって、それは上記の諸作品に見出されるからである。そしてひとが胡堂と啄木との関係について記述する場合にも、それらの作品を典拠にしていることが多いといつてよいであろう。

しかしながら、音楽評論の作品『バッハからシューベルト』のなかに、石川啄木の人柄あるいは生涯についての言及が見出されることが分かったので、私はこれをあえて「発見した」と表現するのである。

今回、ここに紹介するのは、音楽評論の作品『バッハからシューベルト』に見出される石川啄木評についてである。そしてこれとの関連において『楽聖物語』をも参照することにしたと思う。

以下において私が述べることは、次のこと、すなわち、(1)あらえびすは石川啄木の生涯と文学をモーツァルトの生涯と音楽に重ねあわせて考えているということ、そして(2)あらえびすは石川啄木の姿をとおして天才モーツァルトの姿を想い描いているということ、これである。

II モーツァルトと石川啄木 ——『バッハからシューベルト』——

あらえびす著『バッハからシューベルト』は、昭和7年(1932年)4月1日に初版が名曲堂から発行されたものである。私が読んだのは、同年4月10日に発行された再版である。奥付に記されている著者は「野村長一」である。当時の出版事情は詳らかにしないが、初版が発行され、その10日後に再版が発行されているのだから、初版発行と同時に大きな評判をとったというべきなのだろう。

この作品のなかにモーツァルトについての記述があり、その文章のなかに、石川啄木に言及されている。あらえびすは、モーツァルトの天才を語り、天才の自尊心を語るときに、石川啄木を引き合いに出しているといったらよいのかもしれない。

天才詩人石川啄木の自尊心について、あらえびすは次のように語っている。

「薄倖な詩人石川啄木と、私は中学時代を共にしましたが、日頃無邪気で、上機嫌で、気焰家でさへあつた啄木ですが、自尊心の強大なことは人一倍で、その為に、友人達はどれだけ手を焼いたかわかりません、一たびこれを傷つけられると、百年の仇敵の思ひがあるのです。石川啄木とモーツァルトは、甚だ当を得た対象ではありませんが、天才の自尊心が、どれだけ強烈で、どれだ

け始末の悪いものかと言ふことを、私は啄木を通して、モーツァルトを想見し得るやうな気がするのです。」³⁾

あらえびすが石川啄木とモーツァルトの共通点としているのは、天才の自尊心というだけではない。いま上に引用した文章の最初に「薄倅な詩人石川啄木」⁴⁾という表現があるが、「薄倅」であったという点では、モーツァルトも同じであったと言うべきであろう。啄木の生涯を語る時、しばしばその貧困と病苦について語られる。モーツァルトも、そうであったといえることであろう。あらえびすは、モーツァルトの貧困について次のように述べている。

「モーツァルトの生涯は、此自尊心と、これも天才特有の、経済思想の缺如に煩はされて、貧困と疾患と懊悩との連続の感がありました。彼の上機嫌と、溢るる愛情とは、この悩ましき境遇の為に、どれだけ虐げられたことでせう。彼は数フロリンを得る為に「ソナタ」を書き、音楽時計のために「アダチオ」をさへ書かなければならなかつたのです。彼の珠玉の如き作品の多くは、シューベルトに於ける如く、殆ど貧しいパンにさへ値しなかつたのです。自尊心の故に大司教に叛き、故郷を愛するが故に、ウイリアム二世の招きに応ずることの出来なかつた彼には、似た者夫婦の歌い手の妻と共に、貧困から貧困へ、流浪から流浪への生活を続けて行つたのです。」⁵⁾

あらえびすはモーツァルトにおける天才の「自尊心」⁶⁾と「経済思想の欠如」⁷⁾を指摘し、これがこの天才的な音楽家の生涯をして貧困と流浪の生活を余儀なくさせたのだというのである。そして、このことはそのまま石川啄木にも言えるのだ、——あらえびすは暗にそう言いたいのである。

さらに、われわれがいま上に引用した文章に続いて、あらえびすはモーツァルトについて次のように書いているが、これはそのまま啄木の生涯について語っている文章だ、といってもよいようにさえ思われるのである。

「『可哀さうなモーツァルト』——彼の悲哀も愁悶も知らぬ氣な、明るさに充ち溢れた音楽を聴くとき、私は不思議な涙ぐましさをさへ覚えることがあります。栄養不良で死んだシューベルトの音楽と共に、疾苦と悲哀との中に死んで行つたモーツァルトの音楽は、何んといふ又美しさと明るさに漲る音楽でせう。當時の世間は、——曾て神童モーツァルトを歓迎し乍ら——成人したモーツァルトの天才を否定して、彼の前に榮達の門を固く閉してしまひました。彼は自尊心の為に闘い、僅かばかりのパンの為に精根の盡くるまで、ひたすらに書きに書いて死んでしまつたのです。」⁸⁾

あらえびすは「疾苦と悲哀との中に死んで行つたモーツァルトの音楽」⁹⁾と書いているが、この文章の一部を書き替えて、「疾苦と悲哀との中に死んで行つた啄木の文学」と言い表わすこともできるであろうし、「ひたすらに書きに書いて死んでしまつた」¹⁰⁾という評言も、そのまま啄木にも言えるところであろう。

それよりも私が注意したいのは、いま上に引用した文章の初めに見出される「可哀さうなモーツァルト」という表現である。実は、これと同じ表現が、石川啄木に用いられているのである。すなわち、「可哀想な啄木」という表現である。これは、よく知られているように、『面会謝絶』に、さらに『コーヒーの味』に見出される表現なのである。

「可哀想な啄木、私は四十年前の啄木に対して、愚かな兄のような心持でさう思つて居る。可哀想な啄木、——だが、今にして思へば、君は一番幸せであつたかも知れない。我等の仲間、君ほど偉大になつた者はなく、君ほど大衆に愛されてゐる者は無い、百迄生きてゐたところで、私達は、君の靴の紐を解くにも足りないのだ。」¹¹⁾

「可哀さうなモーツァルト」という表現、そして「可哀想な啄木」という表現を並べてみるならば、ここであらえびすが、啄木をモーツァルトに重ねあわせて捉えているということは明らかであろう。あらえびすが実際に知っていたのは、いうまでもなく、石川啄木の生涯である。あらえびすは、盛岡中学に在学していたとき、及川古志郎から石川啄木を紹介されて以来、さまざまな交友関係をもつたのである。その啄木の姿を通して、あらえびすはモーツァルトの生涯を想い描いているといつてよいであろう。

してみれば、あらえびすは、モーツァルトの生涯と音楽、そして石川啄木の生涯と文学との間に、或る共通性を見出していると言つてよいであろう。

次に、あらえびすの作品『楽聖物語』におけるモーツァルトについての記述をみることにしよう。

Ⅲ モーツァルトの生涯と音楽 —— 『楽聖物語』 ——

あらえびすは、モーツァルトの天才とその生涯について『楽聖物語』のなかでも描いている。あらえびすは「不幸な自尊心」¹²⁾ という表現を用いている。モーツァルトの自尊心はこの天才音楽家に不幸な生涯をもたらしたというべきなのかもしれない。しかし、この自尊心があつたからこそ、モーツァルトの芸術が、後世に遺される優れた芸術作品が生まれたといつてもよいのである。

モーツァルトの音楽とその生涯について、あらえびすの記述を見ていくことにしよう。そしてこれを石川啄木の文学と生涯に重ね合わせて読んでいくことにしよう。

あらえびすは、モーツァルトの生涯が貧苦と不遇ななかにあつたと次のように描いている。

- (1) 「この不世出の天才を持ちながら、モーツァルトの生涯はあまりにも不遇であつた。十七歳のとき旅から帰って、イタリーからフランスへと真剣な音楽の勉強を続け、故郷ザルツブルクの大僧正に仕えたが、大僧正の没後、この後継者の無理解に腹を据え兼ね、自暴自棄の振舞いがあつて職を奪われ、それから三十五歳でこの世を去るまで、モーツァルトには、職業らしい職業さえ与えるものがなかつたのである。」¹³⁾
- (2) 「コンスタンツェは経済観念というものを持たなかつた。モーツァルトもその点においてコンスタンツェに劣るものではない。二人は石炭のない冬の夜を、踊りあかして辛くも寒さを紛らせることさえあつた。モーツァルトはしばしばドン底に追いやられ、音楽時計のためにアダジオを書き、数フロリンの金のためにソナタを書いた。そして、「俺は金が欲しいから作曲する。食わなきゃならないからな」と自暴（やけ）なことを言つたりした。」¹⁴⁾
- (3) 「その疾苦のうちに沈湎しながらも、モーツァルトは、妻のコンスタンツェと友人達を愛し続けた。「最も真実な友は貧しい人達だ。富める人達はほとんど友情を知らない」——これはモーツァルトの逆境にも貧苦にもめげない愛の言葉の一つであつた。」¹⁵⁾

こうした不遇な生活、窮乏の生活のなかでモーツァルトは、「珠玉の作品」¹⁶⁾を書き続けたのである。それを可能にしたのが、彼の「強大なる自尊心」¹⁷⁾であったと、あらえびすは述べる。

「貧苦と不遇のうちに、モーツァルトの芸術を救ったものは、実に彼の強大なる自尊心であった。少年時代のモーツァルトが、「愛されること」を望んだのも自尊心の現れであり、青年時代にザルツブルクの卑しい地位に我慢の出来なかったのもまた自尊心の発露である。彼の心は小児の如く純粹で、いささかの妥協も、卑怯な譲歩も考えることが出来なかった。」¹⁸⁾

そして、あらえびすはモーツァルトの芸術について次のように語っている。

「モーツァルトの音楽が、いかなる大衆にもそのまま受け入れられるにもかかわらず、その高貴なる冷美さを失わないのは、低俗な趣味に阿（おもね）りきれない、絶大な自尊心があったためではなかったであろうか。」¹⁹⁾

われわれは、この文中の「モーツァルトの音楽」という語句を「啄木の文学」と置きかえて、この文章を、そのまま啄木の文学について語ったものとして読むことができるのではないだろうか。

注

- 1) 野村胡堂『胡堂百話』中央公論社、中公文庫、1981年、30頁。
- 2) 箱石匡行「野の師父 野村胡堂・あらえびす——「自地域学」と社会科教育の結合を探求しつつ——」、『岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』第7号（1997）、15-30頁。
- 3) あらえびす『バッハからシューベルト』名曲堂、昭和7年（1932年）4月、再版、117-118頁。
- 4) 同前、117頁。
- 5) 同前、118頁。
- 6) 同前。
- 7) 同前。
- 8) 同前、119頁。
- 9) 同前。
- 10) 同前。
- 11) 野村胡堂『面会謝絶』創元社、1952年、44頁。そして野村胡堂『コーヒーの味』東方社、1995年、136頁。
- 12) あらえびす『楽聖物語』電波新聞社、1990年、80頁。
- 13) 同前、80-81頁。
- 14) 同前、81頁。
- 15) 同前。
- 16) 同前、83頁。
- 17) 同前、82頁。
- 18) 同前。
- 19) 同前、82-83頁。